都弱視研

東京都弱視教育研究会
世田谷区桜丘５－19－１
発行人　後藤真司
印刷　依田印刷㈱
第51巻　３号発行　R4.3.7

自己理解と理解啓発の推進

東京都弱視教育研究会 副会長
町田市立本町田東小学校 校　長　望月伸悟

東京都弱視教育研究会（以下「都弱視研」）は、都立盲学校４校（文京、葛飾、八王子、久我山青光学園）、筑波大学附属視覚特別支援学校、そして区市立小・中学校の弱視通級指導学級12校（小学校９校、中学校３校）の計17校の相互の連携を図るとともに、広く弱視教育の研究と普及を推進することを目的として会を運営しています。

本年度、都弱視研では、研究主題を「弱視児童･生徒の自立活動に関する指導内容･方法の研究―発達段階に応じた自己理解の指導の在り方―」として活動を進めてきました。年間11回の研究全体会（授業研究、公開授業､講演会等を含む）を行いました。児童・生徒が自己理解を深める手だてや、将来に向けて自己実現を図るために必要な援助依頼の仕方などについて、全体での研究会とブロック別での研究会を開催し、会員相互の連携・協働を図り、より実践的な研究を目指してきました。新型コロナウイルス感染症拡大防止のために、今年度もオンラインでの開催が続きましたが、少しずつでも予定通りの実施ができるようになることを願っています。

本校は、弱視指導学級の他に、難聴指導学級・言語障害指導学級の三つを併設している都内で唯一の学校です。いずれの学級においても児童の将来的な自立を目指して、保護者との連携を深めながら指導を継続しているところですが、そのためには発達段階に応じた児童自身の自己理解が不可欠です。同時に、在籍する学校・学級の周囲の児童への理解啓発を進める必要があります。町田市においては、該当児童の在籍校においての通級指導を行っているため、担当教員が各校を巡回して指導する都内唯一の学校です。その利点を生かし、弱視・難聴・言語の各学級が、校内において本校児童に対して理解啓発授業を行うだけでなく､該当児童の在籍校においても在籍学年･学級の児童に対して理解啓発授業を行うことを通して、障害者理解を積極的に推進しています。７月に本校での研究授業として公開させていただいたものもその一つです。今年度は東京パラリンピックの開催もあったため、障害者理解の機運も高まりましたが、本校ではこの理解啓発の取組を今後も継続していくとともに、「学校2020レガシー」として位置付けていこうと考えています。

国のGIGAスクール構想に基づき、児童･生徒への一人一台端末の配布と活用が始まりました。まだまだ配備や管理の課題はありますが、個別最適な学習を実現するための有効な手段として、弱視学級の指導においても積極的な活用と実践の紹介などを行いながら、本研究会での情報交換も進めていきたいと思います。

この一年間、関係諸機関の皆様方・ご講演いただいた講師の先生方には、多くのご指導とご支援を賜り、誠にありがとうございました。心より感謝申し上げます。

今後もなお一層努力を継続して参ります。

第７回研究全体会（研究授業）

令和３年11月５日(金)　練馬区立開進第三中学校

「弱視児童・生徒の自立活動に関する指導内容・方法の研究」

― 発達段階に応じた自己理解の指導の在り方 ―

講師　広島大学大学院 准教授　**氏 間 和 仁** 先生

1 研究授業

対象生徒　第３学年　１名
授 業 者　関口 たまき 教諭
題 材 名　「中学卒業後の援助依頼について考えよう」

2 授業者自評

- 高校という新しい環境で援助依頼をすることを想起し、自分の見え方を客観的に捉え説明する力を育てたいと考えました。
- １対１の指導なので、PCやホワイトボードに考えを記述する前の、口頭でのやり取りの時間が大切であると分かりました。
- 合理的配慮を受けられなかった場合を想定するという展開の難しさを感じました。

3 質疑・応答、協議

- 発達段階を考慮し、状況を想起するためにロールプレイでやり取りしながら、思考を深めていく方がいいと思いました。
  →困った状況を見付けるのは難しいので、発問を工夫する必要を感じました。
- 適切な文字の大きさをMN-READで測り、本人が周囲に伝えていくことが大切です。テストは、拡大サイズと全体を捉えるために普通サイズの両方が必要だと思います。
  →22ポイントの拡大教科書を使用していますが、MN-READでは18ポイントが見やすいという結果でした。個に合った合理的配慮を要望していきたいと思います。
- 小中高の指導者が集まっている研究会の特性を生かし、進学先に伝える内容を個々で作成するための指針を作りたいと希望します。
  →小学校で何を学び中学校に来たのか、高校に送り出す前に何を学べばいいのか、拠り所となるものは必要だと思います。

4 指導・講評

- 合理的配慮の前提として、事業主との建設的対話による合意形成の過程があります。個別に対応するべき合理的配慮に前例というものはなく、学ぶ機会をどう守るか、能動的に解決していきます。事業主が替われば練り直しが求められます。
- 授業の中に「障害開示」という概念を使わなかったことにとても共感がもてました。障害が分かることより、何にどのような理由で困っているのかを然るべき相手と共有できること（自己権利擁護力）の方が解決策を提案しやすく、その取組みが本日の授業内容でした。
- 援助依頼について指導するにあたり、メタ認知知識（人、課題、方略）を整理し、さらに自分の見え方をモニタリングする必要があります。中学生という発達段階を考慮すると、自分の見え方を体験的にデータ化したものを集め、活用できるといいと思います。例えば、指導者の見え方と比較する、単眼鏡に表示してある数値から自分の見え方を知る、見え方紹介アプリを使うなどが挙げられます。
- 現在、中学校で行われている合理的配慮を本人が正しく理解することが大切です。中学と高校では課題に差が出るという視点を共有することや、高校入試の際の合理的配慮につなげることで、本日の授業内容はさらに生きてくるはずです。

（記録　小岩小学校　須藤　利紀）

第８回研究全体会（研究授業）

令和３年12月６日(月)　東京都立八王子盲学校

１　公開授業

【対象生徒】　高等部普通科　第３学年３名
【授 業 者】　山田　智生 主任教諭
【単 元 名】　問題演習（三角比）

２　授業者自評

視覚障害のある生徒にとって、図形の学習は難しい単元です。ICTや触察教材を活用し、生徒にどう見せるかがポイントになってしまいがちですが、どのような方法が生徒にとって分かりやすいかを模索することが重要だと思います。本時の座標で三角比を表現することは、教材の工夫により、それぞれがイメージできたのではないかと思います。

３　質疑応答・協議

〈目的に応じた使用教材について〉

①一人一人の見え方に応じて、教材はプリントとデータの両方を使用しています。
②触察教材を使用することで、生徒がどこを見ているか確認することできます。
③板書の代替手段として、Microsoft Teamsの画面共有機能を利用しています。

（記録　小岩小学校　本多　千里）

第９回研究全体会（講演会）

令和４年１月11日(火)

「児童･生徒一人一台タブレット時代の効果的な活用や使いやすいアプリについて」

講師　愛知教育大学 准教授　**相 羽 大 輔** 先生

１　はじめに

ICTは視覚障害のある生徒の主体的な学びを引き出し、点字や触覚教材、視覚補助具と同等のものとして学習指導要領に位置付けられています。ICTが何の役に立ちますか、とよく言われますが、点字や白杖、視覚補助具と同じように手段の一つがICTです。目的達成のために白杖や視覚補助具を用いるように、ICTが有効であれば用いればよいと考えます。

２　私の使い方

文書作成の際は、PCの拡大機能、配色変更、音声読み上げなどを使っています。これらが使えないと大学では全く通用しません。高校生の間に使えるようにしておきたいです。文章量が多くなると見落としが増えるので弱視でも音声読み上げが有効です。PCなのでタッチタイピングも必要です。

視覚補助具としてカメラやビデオ機能を使っています。読む場合は①アクセシブルPDF②音声読み上げ対応の一般電子図書③デイジー図書④オーディオブック⑤私的複製を使用しており、オンラインの対面朗読も利用しています。

課題プリント等、記入して提出するときはスキャナー、プレゼンテーションソフト、プリンターのアプリケーションを使っています。また、原稿用紙に記入する場合はテキストデータ、プレゼンテーションソフト、プリンターのアプリケーションを使っています。

３　まとめ

当事者はそれぞれ工夫してICTを活用しています。情報交換をすると様々な使い方が広まっていきます。

４　質疑より

ICTは大学生になったらすぐに使えるように準備をすることが大事です。

板書を写真に撮るときのシャッター音が気になる場合は、写真ではなくビデオ撮影やパノラマ撮影にすると、少し音が小さくなります。音を出したくない場合には、専用のアプリを使うとよいでしょう。

（記録　文京盲学校　佐藤 世津子）

令和３年12月５日(日)　うえのZooスクール報告

20年以上続く恩賜上野動物園主催の「サマースクール」は、子どもたちの安全面を考慮し、今年度より12月の開催となりました。万全の感染対策のもと、今年は小学校４校から計26名の子どもたちが参加しました。

今年度のテーマは、『モルモットのひみつ』です。秘密を解き明かすべく、モルモットの「食べ物」「うんち」「体重」「聴く」「ふれあい」の５つのブースを周りました。モルモットの食べ物や排泄物、体重や心音・鳴き声について、視覚だけでなく聴覚や嗅覚、触覚を活用し、問題を解きながら自分のペースで学ぶことができました。

聴くブースでは、人間とモルモットの心音を聴き比べ、モルモットの心音の速さに一同驚きでした。ふれあいブースでは、生き物の温かさを感じながら、そっと優しく体をなでる姿が印象的でした。そして直接触れながら、モルモットの足の形や指の数、しっぽの有無など、細部まで観察することができました。各ブースで新しい発見があり、生き物をもっと好きになるきっかけとなったことでしょう。

感染対策など様々な制約がある中、このような楽しいプログラムを計画､運営していただき、子どもたちにすてきな体験を準備してくださった動物園のスタッフの皆様に、心より感謝申し上げます。

（足立小学校　神保　有花）

第62回弱視教育研究全国大会（宮城大会）Web開催

開催期間：令和４年１月14日（金）から３月31日（木）

研究主題

（1）弱視幼児・児童・生徒の特性を生かした指導の在り方を考える。
（2）弱視幼児・児童・生徒に対する専門的指導を通して、特別支援教育における弱視教育を考える。

今年度の弱視教育研究全国大会は、ライブ配信プログラムとオンデマンドプログラムにて開催されています。

漫画家うおやま氏による基調講演では、『ヤンキー君と白杖ガール』を通して、「弱視」が多くの人の目に触れる機会をつくりたいという想いに触れることができました。過去に東京都弱視教育研究会では『ななちゃんの学校生活』という紙芝居を作成し、弱視理解教育において活用しています。このように、弱視教育に日頃から携わる私たちにも、弱視についての情報を発信する力があるはずです。教員として、目の前の指導・支援に留まらず、外部に発信する視点も大切だと気付きました。

本大会では、他にも分科会の発表と３本の教育講演、10本の研究発表を視聴することができます。また、今大会の主催が宮城県ということで、東北地区の盲学校が紹介されています。

（足立小学校　神保　有花）

令和４年度　東京都弱視教育研究会総会・記念講演のお知らせ

日時：令和４年４月22日(金)　午後２時～　　場所：世田谷区立笹原小学校

記念講演講師：筑波大学 人間系（障害科学域）准教授　小 林 秀 之 先生